

スポーツプログラムにおける参加型学習の成果に関する研究

— ヤングアメリカンを分析対象として —

A study on the outcome of participatory learning in sport program

— Analyze The Young American —

体育学部体育学科
山本 孔一
YAMAMOTO, Koichi
Department of Physical Education
Faculty of Physical Education

体育学部体育学科
田原 陽介
TAHARA, Yosuke
Department of Physical Education
Faculty of Physical Education

体育学部体育学科
崔 回淑
CHOI, Hwoisook
Department of Physical Education
Faculty of Physical Education

次世代教育学部こども発達学科
高田 康史
TAKATA, Yasufumi
Department of Child Development
Faculty of Education for Future Generations

Abstract : The purpose of this study, it would be to consider the outcome of participatory learning in sports programs.

Research method, we conducted a questionnaire survey to students who participate in sports programs.

The main research results,

- ① Students had expected, challenge to new things, communication with people of other cultures, and performance to cooperate.
- ② Students learned, challenge to new things, performance to cooperate.
- ③ Students expectations and learning, in the participatory learning was found that not necessarily coincide.

Research agenda of the next, the pickpocket in taking into account the characteristics of the sports program.

Keywords : participatory learning, sports program

I. 緒言

近年、大学等の高等教育機関についての学習方法について様々な議論や提言がなされている。大学高等教育機関については、2005年1月28日中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」や、2008年12月24日中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」の中で、「産業界をはじめ実社会の人材需要は「独創性」「即戦力」「基礎学力」等高度化・多様化の一途」をたどっている反面、「学生の知識・能力の低下や多

様化を招いているのではいか」（文部科学省，2007）と懸念を表明している。また、「学生を本気で学ばせるとともに、単位制度を実質化させる」ために、「学習の動機付けを図りつつ、双方向型の学習を展開するため、講義そのものを魅力あるものにする」とともに、体験活動を含む多様な教育方法を積極的に取り入れる」（文部科学省，2008）必要性を示している。

では、どのような教育方法で学習展開がされるべきなのか。非学校的な状況での学習に関する認知心理学・文化人類学等の分野の研究成果（例えば、Lave,

1986, Lave & Wenger, 1991) によって、学習に対する視点は、テクノロジーや他者のとの活動的で対話的な交渉を通じて、人々の考え方や振舞い方がどのように変化していくかというプロセスへと注がれるようになった。

また、学習研究の文脈において、学習を「頭の中でおこる知識獲得プロセス」ではなく、「環境とのコミュニケーションを通じたマイセオリーの構築プロセス」(Kolb, 1984) として理解する学習観が浸透しつつある。

このような潮流の中で参加型学習について着目がされ、特に国際理解教育や開発教育の分野などで多用されている。参加型学習が学校教育の中に飛躍的に広まったのは2002年の「総合的な学習の時間」導入前後であり、「新貿易ゲーム」や「世界がもし100人の村だったら」などの教材は、現在では多くの学校で実践がされている(田中, 2007)。

スポーツ分野においても、従来のスポーツ種目だけではなく、様々なテーマにおいてワークショップ型の参加型学習が展開されつつある。例えば、アメリカ合衆国に母体を持つ「The Young Americans」(以下ヤングアメリカン)は、ダンスやミュージカルといった教材を主とした参加型学習のスタイルを取り日本をはじめ世界各国でそのプログラムを展開してきている。

本稿は、2014年5月に環太平洋大学で行われたヤングアメリカンと本学との連携プログラムを分析対象とし、その参加学生への調査の結果から、スポーツイベント等の参加型学習プログラムを通して、学生がどのような学習成果に期待し、実際どのような学習成果があったのか、その学習成果の期待と学習成果についての関係について検討を行う。

II. 方法

1. 調査票の作成

本研究では、参加型学習プログラムへ参加する前の学生へ事前調査(pre)と、プログラム参加した後の学生への事後調査(post)の両方を実施する。

プログラム参加の成果については、ヤングアメリカンのホームページや各種イベントで配られるパンフレット、また担当者とのヒアリング等の諸資料を整理し、参加することにより身に付くだろう能力や経験の内容について精査を行った。その結果、「自己変革」「表現能力」「多文化コミュニケーション」「自己発見」「協調性」の5つを本参加型学習プログラムの成果と

して設定することとした。

調査票へのワード設定は、できる限りヤングアメリカンの成果に関する英語表現を崩さないように注意し、筆者らによりワーディングを行った。また、学生数人に予備調査を実施し、答えにくい項目などの検討を行い、修正した。

2. 調査の概要

本研究の調査では、プログラム実施前に行う事前調査と、プログラム実施後に行う事後調査との比較を研究課題の一つにおいている。対象のプログラムは二日間に及んで実施されるため、事前調査をプログラムのオリエンテーション時に、事後調査をプログラム終了直後に行った。調査の概要については、表1のとおりである。

表1 調査の概要

調査時期	平成26年5月19日 プログラムオリエンテーション時 (pre) 及びプログラム終了時 (post)
調査対象	参加型学習プログラム (ヤングアメリカン) 参加学生 222名
有効回答数	N=215 (回収率96.8%)
調査項目	基礎項目 (5項目) ・所属学科 ・学年 ・性別 ・参加経験の有無 学習参加の期待 (pre 5項目) 学習参加の成果 (post 5項目) 満足度、再参加希望 (各1項目)

本調査の対象者は、本学の2年生及び3年生である。本プログラムは、本学の正課の授業として設定されているわけではないため、学生の取得単位には影響がない。よって、本プログラムに参加したいという意思を持つ学生である。参加学生はなんらかの成果への期待があって参加しているため、本調査の趣旨との整合性は保たれていると判断した。調査対象者の概要については、表2のとおりである。

表2 調査対象者の属性

所属学科		
項目	N	%
こども発達	47	21.8
教育経営	51	23.6
国際教育	32	14.8
体育	81	37.5
健康科学	5	2.3
学年		
項目	N	%
2年生	143	66.5
3年生	72	33.5
性別		
項目	N	%
男	103	47.9
女	112	52.1

Ⅲ. 結果及び考察

1. プログラム参加への期待 (pre)

ここでは、事前調査の結果から参加型学習プログラムへの期待について検討する。まず、「ヤングアメリカン」のプログラムについての参加の有無については、ほとんどの学生が今回の参加が初めてであった(表3)。よって、ほとんどの学生が未だ経験したことのないプログラムに参加することとなり、参加型学習プログラムの学習特性に見合った状態である。

表3 プログラム参加の回数

項目	N	%
1回目	173	95.6
2回目	5	2.8
3回目	1	.6
4回目以上	1	.6
合計	181	100.0

表4は、どのような事を期待してヤングアメリカンに参加したか、といったプログラム参加への期待についてまとめたものである。なお、この設問については、複数回答可能とした。なぜなら、ほとんどの学生がヤングアメリカンに初参加であることと、参加型学習への経験が少ないと考えられるため、単回答にて回答することが困難であるといえる。そこで、複数回答とし、このプログラムへの期待の大枠をつかむこととした。

表4 プログラム参加の期待 (複数回答可)

項目	N	%
新しい事へのチャレンジ	100	46.1%
表現力を高める	56	25.8%
他文化の人とのコミュニケーション	99	45.6%
新たな自己発見, 気づき	40	18.4%
協力してパフォーマンスする	120	55.3%

まず、本プログラムに参加するうえで最も期待されていたのは、「協力してパフォーマンスする」(55.3%)であった。ヤングアメリカンのプログラムは、ダンスやミュージカル等を組み合わせ最終的にはショーを作り上げることが予め計画されていた。ダンスやミュージカル等の経験がない学生が多いため、それを経験し、さらには他の学生と協力することを楽しみにしていることが伺える。

次いで「新しい事へのチャレンジ」(45.6%)、「他文化の人とのコミュニケーション」(45.6%)と続いている。このことは、日常生活にない1日かかりのプログラムへの参加であるため、新たなことへの挑戦や、普段接することのない外国人等とともに参加するため、それに対する期待があったのだと考えられる。

また、上記3つと比較すると、「表現力を高める」や「新たな自己発見」といった項目については、低い値(25.6%, 18.4%)であった。

2. プログラム参加後の成果 (post)

ここでは、事後調査の結果から参加型学習プログラムに対しての成果について検討する。表5は、本プログラムについて最もどのようなことが身についたかといった学習成果についてまとめたものである。なお、この項目については、単回答とした。それは、長時間に渡るプログラムであるため、多くの学習成果が想定される。その中で、特に学習成果の高かった学習成果について検討するためである。

表5 プログラム参加の成果 (単回答)

項目	N	%
新しい事へチャレンジし達成感を得た	76	35.8
表現の大切さ	47	22.2
他文化の人とのコミュニケーション	29	13.7
新たな自己発見	12	5.7
協力してパフォーマンス	45	21.2
その他	3	1.4
合計	212	100.0

まず、最も高い学習成果をあげた項目は「新しい事

へのチャレンジし達成感を得た」(35.8%)であった。これは、ダンスやミュージカルといった普段慣れない学習への参加が関係していると考えられる。また、プログラムの最後に練習したショーを他の学生に披露したという経験が達成感を強めたことも伺える。

次いで、「表現の大切さ」(22.2%),「協力してパフォーマンスする」(21.2%)といった項目が高い値を示した。「協力してパフォーマンスする」経験については、普段のスポーツ活動等でも経験できることであるが、プログラムの内容としてダンスが中心であるため、より成果が高まったのだと考える。また、「表現の大切さ」については、プログラム前のアンケート結果において期待値が比較的低い項目であった。これは、プログラム全体を通じて学習者にとっては予期しない成果であったことが伺える。

学習者の満足度に関しては、95.8%の学生が大変満足したと回答した。本学習プログラムがより充実し、多くの学生に魅力が伝わったことであると考えられる。

3. 参加前と参加後の比較

ここでは、プログラム参加前の期待とプログラム参加後の成果についての比較考察を行う。表6は、プログラム参加前の期待とプログラム参加後の成果についてのクロス表である。

プログラム参加後の成果でも述べたが、「新しいことにチャレンジすること」については、他の項目と比較すると高い数値であった。これは、プログラム参加前の段階で期待する成果についても、「新しいことへのチャレンジ」については高い数値であったため、学習者にとっては期待どおりの成果があがった項目であるといえる。

一方で、「期待する成果」に対して「学習後の成果」

が相対的に低い項目もみられた。例えば、期待する成果として「新たな自己発見、気づき」をあげた学生のうち、最も学習成果の高かった項目に「新たな自己発見、気づき」をあげた学生はわずか5%であった。また、「期待する成果」として「多文化へのコミュニケーション」をあげた学生も同様に、学習成果としては低い値を示した。これは、プログラムの特性が影響していると考えられる。例えば、新たな自己発見については、一連のプログラムを経験した後に、自己への振り返りがあるのは他者との双方向のコミュニケーションや、自分自身の振り返りがあった後に起こってくるものである。また、自己への気づきを学習成果として期待した学生は、プログラム運営者のペースによりショーを完成するワークショップが多数の時間を占めた今回のプログラムでは、自身の期待する学習成果があがっていなかったことも考えられる。

IV. まとめにかえて

本研究では、2014年5月に、環太平洋大学で実施された参加型学習プログラム「ヤングアメリカン」に参加した学生を調査対象とし、参加型学習プログラムを通して、学生がどのような学習成果への期待をし、どのような学習成果があったのか、その関係について検討してきた。

学生の学習成果への期待については、「新たな事へのチャレンジ」「他文化の人とのコミュニケーション」「協力してパフォーマンス」の値が相対的に大きく、学習成果については「新しい事へのチャレンジ」「協力してパフォーマンス」については相対的に大きかったが、「他文化の人とのコミュニケーション」については小さい値となった。

また、学習成果への期待と、学習成果についての関

表6 参加前の期待と参加後の成果とのクロス表

参加前\参加後	新しい事へチャレンジ		表現の大切さ		他文化コミュニケーション		新たな自己発見		協力してパフォーマンス		その他		合計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
新しい事へのチャレンジ	37	37.0%	18	18.0%	15	15.0%	8	8.0%	20	20.0%	2	2.0%	50	100.0
表現力を高める	13	23.2%	15	26.8%	10	17.9%	4	7.1%	14	25.0%	0	0%	91	100.0
他文化コミュニケーション	32	32.3%	25	25.3%	12	12.1%	6	6.1%	21	21.2%	3	3.0%	99	100.0
新たな自己発見、気づき	15	37.5%	9	22.5%	4	10.0%	2	5.0%	9	22.5%	1	2.5%	40	100
協力してパフォーマンスする	47	39.2%	25	20.8%	16	13.3%	4	3.3%	26	21.7%	2	1.7%	120	100

係は、必ずしも対応した関係にあるわけではなく、特に「新たな自己発見」について学習成果の期待があった学生は、学習成果としては相対的に小さい関係であった。これは、学習成果への期待と実際の学習成果の間にずれがある事を示唆するものであろう。

しかし、この「期待する学習成果」と「学習後の成果」についてのいわゆる「ギャップ」は決して悲観的なものばかりではない。確かに、参加した学生の意見としては、「期待していたものと違っていた」とも取れるが、一方で想定した学習よりも多様な学習成果を得ることができたとも解釈することができる。これは、講義型の一斉授業によるいわゆるこれまでの知識獲得のプロセスにはない側面である。この「思いもよらない学習成果」こそが、体験型学習の特性ではないかと考える。

今後の課題については、学習成果としてあげられた項目については、後に他の参加学生とのコミュニケーションや自分自身が振り返り学習の成果があがる項目もある。また、その他の学習場面でも態度の変容等に影響を与える可能性がある。プログラム直後のアンケートと数週間や数か月単位で間を開けた調査の必要性は今度の検討課題である。また、今回は、参加型学習に慣れていない学習集団を対象者としたため事前の訓練等は行っていない。そのため今後、参加型学習を実践する場合は、活動内容だけに固執しないような訓練を日々の学習の中で日常的に行うことが必要であると考えられる。

引用・参考文献

- 開発教育協会（2006），開発教育実践ハンドブック・参加型学習で世界を感じる，開発教育協会，pp6-8
- 開発教育協会（2006），世界がもし100人の村だったら，開発教育協会
- 文部科学省（2002），青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について（答申），文部科学省
- 文部科学省（2005），我が国の高等教育の将来像（答申），文部科学省
- 文部科学省（2008），学士課程教育の構築に向けて（答申），文部科学省
- 田中治彦（2007），参加型開発と開発教育－「参加型学習をキーワードとして」，開発教育54，pp8-22
- 田中紀子（2000），「参加型学習」再考－現状分析の試みを始めて－，人権教育13，pp80-84